

ひと脈々

病原体から身を守る半面、暴走するとリウマチや動脈硬化などの難病を招く免疫機構。日本はその研究で世界のトップクラスだが、関西には権威が数多く集まる。才能が優れた師に

阪大、独創研究のDNA

出会い、厳しくも自由な環境でもまれ、ライバルと競いあつても協力する……。地元の利と人の和が重なり、新たな知を生み出している。6月26日、阪大医学部の旧第3内科（現呼吸器・免疫アレルギー内科）の出身者が阪急電鉄春日野道駅近くに集まった。元学長の山村雄一（64）と日本のノーベル賞を賞賛する「日本国際賞」を受賞。重要な免疫物

質「インターロイキン6（IL6）」を見つけた。リウマチ治療薬の開発につながった成果だ。平野は8月末、阪大元学長になる。弟子の番長静男（阪大教授、58）が医学分野で最も権威のある賞の一つ「カドナー国際賞」に決まった。

「一になった。「ノーベル賞級の成果でも教科書に1行載るだけ。人を育てれば、その弟子はまた次の人を育て、自分の考えが拡大再生産される。山村の口癖を聞かされた。山村は「後大幅の花を咲かせた。」「後誰かがノーベル賞を取れば完璧だな」と笑う。岸本は14年、米国留学からサンナイの助手として復帰。20人が話し詰った状態で研究にいらした。兵庫医科大学

「奥さんまで来た次の日の不始末だったのに……」。山村の期待に応えるため、岸本たちは頑張った。いづつか、岸本重臣」と呼ばれるようになった。岸本は弟子たちに厳しく教えた。「マウスをフックアウト。特定の遺伝子を動かさなくする。でもいへんら、お前をフックアウトした」と研究室に響き渡る声で怒鳴った。

弟子たちも「たか。与えられたテーマをそのままやる。」「はなかった」と菊谷は話す。菊谷は免疫反応で重要な役割を果たした抗体「CD40」を見つけた。嫌々実験をしているうちに、興味のあるテーマと関連することが分かって方針転換した結果だ。「先生がやっていた研究はしません。京大教授の長沢丘司（50）は大学院の配属初日に「宣言した。おもしろいっちゃ。岸本は免疫細胞が作り出される仕組みの解明という難しいテーマを与えた。

岸本忠三
阪大特任教授・元学長



中西憲司
兵庫医科大学長



菊谷仁
阪大歯生物病
研究所所長



長沢丘司
京大教授



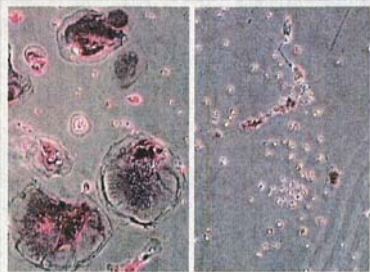
熊ノ郷淳
阪大教授



- 弟子**
平野俊夫(阪大教授)
番長静男(阪大教授)
田賀哲也(東京医歯大教授)
- 孫弟子**
竹田潔(阪大教授)
河合太郎(阪大准教授)
竹内理(阪大准教授)
- ひ孫弟子**
山本雅裕(阪大准教授)



山村雄一
元阪大学長



岸本らの成果を生かしたリウマチ治療薬「アクテムラ」。関節を壊す細胞(④)の大きさを抑える(⑤)=中外製薬提供

当然、うまく進まなかった。「実験計画が悪いんちゃうか。遅すぎる」。たまたま、長沢の周りには苦勞する院生が多かった。岸本は「でげへんもん部屋」と呼んだが、みな成果を上げた。「どなられると頭に来たが、本質を突いてた。いすれ結果が出るのと分かってたんでがんばれた」と長沢は振り返る。「いくら努力しても、科学の世界は結果がすべて。岸本先生はそのことを教えていた。長沢はそう考えている。

次代のスター続々

「言うときかかんやつが偉なる」。岸本も細かいことは言わず、見込んだ弟子には自由をやらせて、「一人柄もええ、研究のセ

鬼の師匠 応える弟子

「NSもよし」。岸本が期待する若手教授の熊ノ郷淳(45)は大学院生時代に苦勞した。岸本から「おまえは研究者に向かん。医者として病棟に戻れ」と言われたが、夢を捨てられず、菊谷の下について成果を出した。昨年は「大阪科学賞」、今年には文部科学大臣表彰を受け、竹田潔(阪大教授、44)とともに次代のスター研究者と期待されている。今年4月、熊ノ郷は旧サンナイの教授に就任。研究者としての今後を考える。研究に専念できる微研(編集委員 青木慎一)

教授のまがよかった。雑用が増えて多忙になり「家庭内での株は急落中」。それでも旧サンナイに戻ったことは「次世代を育てよ」という天命だと考える。熊ノ郷は若者100人に会うことを課し、学会の集まりに積極的に参加する。その中から、阪大と慶大、徳島大の医学部の首席卒業生が来春、大学院生として来る。「若い人が挑戦する中から何か生まれれば、熊ノ郷は夏休みから秋の学会シーズンにかけて全国を巡回する。」